



子どもたちに「心震わせる」体験を —「生きる力」を育む教育課程の集大成としての広島修学旅行—

令和6年12月13日

(公財)広島平和文化センター 副理事長 谷 史郎
(平和首長会議事務局)

平和を尊重する意識が高まるプロセス（広島で平和学習の集大成が可能な理由）

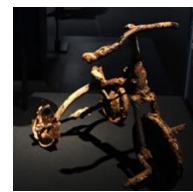
（公財）広島平和文化センター・広島市が令和6年3月に実施した広島修学旅行に関するアンケート調査結果から

① 広島で、戦争・原爆被害の悲惨さとその愚かさを、**様々な視点からリアルに感じ取ること**ができ、**自分ごと・当事者意識**につながる。

- ・原爆ドーム、資料館の展示などを通じ、実際に起こった出来事をイメージできた。
- ・被爆者はじめ沢山の方々に会い、平和への強い思いを受け止めた。
- ・平和記念公園にしか存在しない緊張した空気（雰囲気）を体感した。
- ・沢山の外国人観光客を目の当たりにし、世界からの関心の高さを知った。



原爆ドーム



資料館展示物
三輪車の遺品
（寄贈者：狭谷信男氏）



被爆体験講話

写真：広島市、広島平和記念資料館

② 平和の対極にある、戦争・原爆被害の存在を知り、当たり前だと思っていた平和な生活が、**実は当たり前ではなく、先人の努力の上にかち取られた有り難いもの**だと意識が変容する。

③ そうである以上、平和は黙って与えられるものではなく、**自ら守っていかなければならない**と自覚する。

- ・**日常生活**で自分にできることを実践
（人間関係を大切にする、ルールを守る、当たり前のことを当たり前に行うなど）
- ・社会を担う一員として、戦争・被爆体験を**語り継いでいく責任**を認識

修学旅行により広島を訪問した児童・生徒数と訪問割合（全国地域別）

（令和 5 年度）

区 分	全 国								
		北海道	東 北	関 東	中 部	近 畿	中 国	四 国	九 州 沖 縄
修学旅行生数 （小・中・高）（A）	344,327人	7,596人	9,010人	75,287人	56,358人	88,377人	61,261人	22,360人	13,527人
1 学年当たりの 児童・生徒数（B）	1,011,408人	37,463人	65,408人	335,673人	175,909人	179,294人	60,075人	29,274人	128,312人
訪問割合（A/B）	34%	20%	14%	22%	32%	49%	102%	76%	11%

※ 地域別の訪問状況を概観するため、子どもたちの広島訪問を 1 回と仮定し、1 学年当たりの児童・生徒数に占める修学旅行生数を訪問割合として試算した。

※ 数値は、修学旅行生数は令和 5 年度の広島平和記念資料館入館者数、1 学年当たりの児童・生徒数は学校基本調査による。



平和記念資料館

「生きる力」を育む教育課程の実例

広島修学旅行は、各学校での「総合的な学習の時間」における、いのち、人権、環境、平和など**多彩な学び※を集大成**するもので、**全体として、子どもたちの「生きる力」を育む重要な教育課程**と位置付けられている。

※生徒の理解を、日常生活から地域・国家・国際社会へ、また、現在から過去・未来へとつないでいくことを指向

東村山第三中学校

<3年間を見通した指導>

「いのち・人権・平和」の学習を3年間を通した総合的な学習の時間のテーマと設定し※、広島修学旅行はその集大成

※ 市内にハンセン病療養所の多磨全生園が存在すること、また、過去に中高生が路上生活者の命を奪う事件が発生したことが背景

<各学年における学習内容>

「いのち・人権・平和」の学習は幅広い内容※にわたるが、「平和」の部分の時間数は以下のとおりである。

※ 各学年で生徒の状況を勘案しつつ、創意工夫を加えて構成

(第1学年) 「身近な安全・東村山市の平和に学ぶ」

内 容：いじめや学校生活のルールの考察、近隣の戦争関連遺跡の映像等での紹介
(旧日立航空機株式会社変電所等)

計約39時間

約 8 時間

(第2学年) 「東京大空襲を中心に学ぶ」

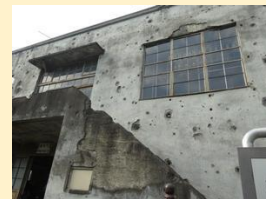
内 容：東京で平和について学ぶ(東京大空襲・戦災資料センター、浅草寺の戦争遺産、昭和館等)
原爆について学ぶ(被爆体験伝承講演会、被爆体験記・原爆詩朗読会)

約15時間

(第3学年) 「ヒロシマ、原爆を中心に学ぶ」

内 容：原爆について映像資料等を用いて学び、旅行前に平和宣言文を作成
旅行後、未来を見据えた、現代社会の課題について考察(レポートを作成)

約16時間



旧日立航空機株式会社変電所
無数の弾痕が確認できる外壁

写真：東大和市立郷土博物館

東村山第七中学校

<目的地を広島に変更した3つの理由>

- 戦争体験が風化する一方、今なお多くの国際紛争が継続し、その終結は見通せない。そのような中、子どもたちが、平和や戦争を自分ごととして捉え、**未来に向けて考え、行動する力量**を身に付けることが求められている。
- 「京都・奈良」は歴史を知るための見学という意義はあるものの、旅行の側面が強く、「広島」のように**3年間のスパンで学習内容を深めていく**性格のものではない。
- また、広島は、東京から遠く、**訪れる機会が多くはない場所**なので、かえって、修学旅行先として適している。

<各学年における学習内容>

「地球市民～よりよい社会をつくるために～」を3年間を通した総合的な学習の時間のテーマと設定

計約50時間

(第1学年) 「現在を知る」…「環境学習」

約15時間

対象エリア：東村山を中心とする多摩地域

内 容：校外学習（多摩動物公園）、環境問題に関する調べ学習

(第2学年) 「過去を学ぶ」…「人権・平和学習」

約20時間

対象エリア：東村山から東京都へ

内 容：ハンセン病学習、校外学習（第五福竜丸展示館、東京大空襲・戦災資料センターなど）

広島市立己斐中学校との学校間交流（オンラインで、お互いの住む地域について発表し、質疑応答）

(第3学年) 「未来を創る」…「平和学習、国際理解」

約15時間

対象エリア：広島

内 容：調べ学習（「佐々木禎子さん・原爆後遺症」、「学徒動員の学生たち」等8つのテーマ）

テーマ毎に「平和宣言文」の作成（広島での平和セレモニー時に使用）

広島修学旅行の実例（事項別）

参考

東村山第三中学校

- ・ 日程：令和6年9月11日～9月13日（2泊3日）
- ・ 対象：3年生 165名
- ・ 行程：1日目 広島（資料館見学、被爆体験者講話
碑めぐり、平和セレモニー等）
2日目 京都
3日目 京都 広島への修学旅行は3回目

東村山第七中学校

- ・ 日程：令和6年9月3日～9月5日（2泊3日）
- ・ 対象：3年生 137名
- ・ 行程：1日目 広島（宮島）
2日目 広島（資料館見学、被爆体験者講話
碑めぐり（**学校間交流**）、平和セレモニー等）
3日目 京都 広島への修学旅行は初めて

1 広島変更時の教員間のコンセンサス形成

- ・ 広島への修学旅行は、「いのち・人権・平和」の学習の集大成と考えられたため、校内で特段の異論はなかった。
（従来の京都での行程を残したことが要因と考えられる。）

- ・ 当時1学年の学年主任と総合的な学習の時間担当教員が広島への修学旅行を提案した。教員全員へのアンケート調査では**賛否が大きく分かれた**。
- ・ 東村山第三中学校の学年主任から、広島修学旅行について、**説明してもらう機会**を持った。生徒の「生きる力」を育む重要性から、最終的に校長の判断で「広島」実施の試行を決定した。

2 保護者の反応

- ・ 本年度の旅行業者からの修学旅行プレゼンテーションでは、参加した**全ての保護者が、広島での平和学習の意義を認めていた**ことが印象的だった。
- ・ それ以外、保護者から広島への修学旅行について特段の指摘はない。

- ・ 保護者からは、「費用がかかる」ということではなく、「**今の時代だからこそ広島に行くことは意味があり、必要だ**。」「遠いからなかなか行けないので良い。」など肯定的な意見が多くあった。
- ・ 一方、「奈良に行かせたかった。」「京都・奈良に戻してほしい。」といった意見は一切聞かなかった。
- ・ 特に実施後は、「**本当に修学旅行が楽しかったみたいだ**。」「たくさん学んできたようだ。」とプラスに働いた印象がある。

3 教員から見た教育的効果

【学年主任のコメント】

- ・ 広島修学旅行の意義は、生徒の心に**平和の種を一粒まくこと**にある。自分の足で広島を踏み、その空気を感じ、この地で何が起きたのかを想像しながら、**平和のために自分ができることを考えること**、また、**生きていることの尊さをかみしめること**は、生徒にとってかけがえのない経験となる。

【令和6年度実施学年のアンケート結果】

※ そう思うを『4』、そう思わないを『1』とした場合の回答

問 今回の修学旅行は楽しかったですか。

答 4:**85.5%** 3:10.9% 2:1.8% 1:1.8%

問 今回の修学旅行で学ぶことができましたか。

答 4:**79.1%** 3:19.1% 2:1.8% 1:0%

【生徒の意識の変容】

- ・ 3年間をかけて**少しずつ意識が変容**してきた。**主体性**、「**自分ごと**」ということにこだわってきた成果として、「**自分が動かなければならない**」という意識が高まってきた。

【日常生活やモラルの改善】

- ・ 急激に日常生活やモラルの改善につながっているとは言えないが、3年生である現在は、1年生の頃に比べ、**集団や他者を意識した行動**をしようとする生徒が増えており、また、**他者への思いやり**を感じられる場面も増えている。

4 生徒の感想から見た教育的効果

- 今まであまり現実味を感じなかったが、現地に行き、**本当に原爆が落とされたのだと感じた**。唯一の被爆国として多くの人に原爆の恐ろしさを知ってほしい、核がなくなってほしいと思った。
- 今までではテレビやネット、写真などでしか見たことのない**原爆ドーム**を直接自分の目で見て、戦争の悲惨さや怖さをとても実感することができた。
- **被爆者**の方が、「戦争真っ只中、どのような光景が広がっていたのか。」「人々はどうなっていたのか。」を、とても詳しく話してくださり、貴重な体験ができた。
- 実際に広島に行ってみて、**慰霊碑**に刻まれている言葉の一つ一つに重みがあり、改めて戦争はもう二度と繰り返してはいけな
いと痛感している。

- 実際に広島に足を踏み入れたことで、**平和の尊さ、命の重さ**について感じたことがたくさんあった。**平和に向けて一歩踏み出してみよう、と背中を押してくれた**、そんな修学旅行だった。
- 広島市立^{こい}**己斐中学校の生徒と、とても楽しくしゃべりながら碑めぐり**をした。碑に込められた思いを詳しく説明してくれて、改めて戦争の悲惨さを知った。お互いに仲良くなれて、また交流したいと思った。
- 修学旅行で、**たくさんの外国の方**を見た。日本の文化を知ってくれることはうれしいし、「相手を知る」ことの輪を広げていくために何かしたいと思った。

広島の支援策①「平和学習を考える教師の集い(仮称)」の開催（素案）

（R7新規事業として検討中）

目的

広島修学旅行を目標に据えた平和学習は、西日本においては、各学校での事前・事後学習を含め広く定着しており、大きな成果を上げている。実施校の教員からは、「**日本中の子どもたち**に、10代が終わるまでに、一度は被爆地を訪れ、**心を震わせる機会**を作ってあげていただきたい。」との声もあがっている。

このため、広島で「平和学習を考える教師の集い(仮称)」を開催し、教員間で、広島修学旅行を目標に据えた、包括的な平和学習の**事例発表**と**討議**を行うとともに、広島での平和学習プログラムを実際に**体験**いただき、今後の平和学習の展開に活かしていただく。

対象・人数

年**50名**程度〔東京都および関東5県（茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉）の公立中学校教員等〕
(旅費は当財団が負担)

実施時期等

8月、3月（25名程度×2回）

内容（検討中）

1日目

- ・ 平和学習実践事例発表・討議（広島修学旅行**実施校担当教員**）
- ・ **広島**の教員との懇談
- ・ 被爆体験講話（被爆者）聴講

2日目

- ・ 平和記念資料館等の見学
- ・ **本川小学校・袋町小学校**平和資料館の見学
- ・ ヒロシマ・ピースボランティアによる碑めぐり
- ・ 朗読ボランティアによる朗読体験
- ・ 平和記念公園での**VR体験**

広島の支援策② 平和学習モニター校指定制度（素案）

（R7新規事業として検討中）

目的

平和学習モニター校を指定し、修学旅行先の**広島への変更**を支援する。あわせて、実際に広島修学旅行を目標に据えた、包括的な平和学習の効果を**地域で広く発信**してもらうとともに、当財団としても修学旅行時に提供する**プログラムを充実**するための参考とする。

対象校

年**20校**程度

〔 東京都および関東5県（茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉）の公立中学校 〕

5年程度継続予定
(20校×5年=100校)

モニター校に実施していただく内容

広島修学旅行（初回であることが要件）

事前学習・事後学習

アンケート調査、**地域での発信**などへの協力

モニター校に対する支援

- ・ 利用可能な事業・情報などの提供

事前学習に対する支援（例）

他校における先行実践の紹介
平和学習講座講師の派遣
被爆体験伝承者の派遣

広島での平和学習に対する支援（例）

広島の子どもたちとの交流（**学校間交流**）
ヒロシマ・ピース・ボランティアによる**班別ガイド**
原爆詩の朗読体験
平和記念公園での**VR体験**など

- ・ 生徒1人当たり**3,000円**の助成金の支給（3年以内の分割支給も可）

平和を求める「**ヒロシマの心**」※は、子どもたちにとって大切な学びとなります。

広島修学旅行を目標に据えた平和学習に**関心をお持ちの学校・教員の皆さん**は、是非 ① 広島での平和学習研修会、② 平和学習モニター校について **積極的に参加**いただきますようお願い申し上げます。心よりお待ちしております。

※「**ヒロシマの心**」：過去の悲しみや憎しみを乗り越え、人類全体のために平和という理想を希求

栗原貞子氏（被爆者・詩人）の言葉

- 教師たちの現地調査や下見など用意周到な準備と子どもたちの主体的な参加によってヒロシマ修学旅行の一大ドラマが演じられ、生徒たちは参加することによって精神的に被爆し、核の問題を他人事としてではなく、自分の問題として捉え、生命や人権、平和の尊さを知るようになったのであった。
- その始めに教師ありき。教師が人間的感動を持って生徒にぶつかって行くなれば、生徒たちも感動の火花をもって答えるのである。**教師の人間的情熱**こそが生徒の人間としての可能性を開花させるのである。

【「碑に誓う 中学生のヒロシマ修学旅行」（江口 保 著）1983より】



問い合わせ先

平和記念資料館 啓発課 松浦、新田

TEL : 082-242-7828

メール : keihatsu@pcf.city.hiroshima.jp